映画・本・歴史のこと

〈第40回（最終回）〉新宮の三人

有田誠（ありたまこと）京丹波町在住の映画愛好家。写真は大逆事件で処刑された大石誠之助

貧しい人（被差別部落）は無料、金持ちからは多く取るのが方針だった。

一九〇八年、旧知の幸徳秋水が大石宅を訪れる。労から肺結核が悪化、結局十六日間、誠之助の診療を受け、滞在した。

幸徳はその時、誠之助と親しい高木顕明（けんみょう）の浄泉寺で、談話会に出席した。浄泉寺は、門徒百八十八人、うち百二十人が被差別部落だった。部落民と寝食を共にする高木住職は、他の寺院から異端視された。日露戦争中は、他の寺院と違い、非戦論を貫いた。官権は高木を社会主義者と見なした。

大逆事件のでっちあげ裁判で、死刑判決、翌日無期懲役となる。秋田監獄の独房で、三年後、縊死した。真宗大谷派は、「擯斥（ひんせき）」処分とする。これが解かれたのは、八十五年後であった。

大石誠之助は、紀州の代表格として処刑された。二〇一八年、新宮市議会は、全会一致で、彼を名誉市民とした。

二人の墓は、新宮南谷共同墓地にある。少し離れて、中上健次の墓もある。

大逆事件への反応

スパイだの国旗だのと今また激しさを増すニッポン的な抑圧の精神構造は、筆者には、山県有朋（やまがたありとも）とその子分桂太郎内閣に端を発しているように思える。こういう長州閥の天皇を利用した貧相でみみっちい自己権力の維持拡大の短視眼的弾圧は、実に近現代日本の不治の病である。

これに反応した作家は多いが、何人か紹介してみる。

石川啄木は憤激した。非公開の裁判記録を、弁護士平出修に見せてもらう。評論『時代閉塞の現状』と記録『日本無政府主義者陰謀事件経過及び付帯現象』を残した。

徳富蘆花も激怒、死刑執行の翌月、一高で演説『謀反論』をする。政府はこれを不敬演説とし、新渡戸稲造校長を譴責処分とした。

森鴎外には『食堂』という小品がある。平出修と与謝野晶（鉄幹）が、欧州の社会思想について、森に意見を聞いたのが、もとになっていると思える。与謝野は、「誠之助の死」、佐藤春夫は、「愚者の死」を詠んだ。

堺利彦は処刑後、各地の遺族を訪ねた。誠之助の墓碑銘は堺による。この旅の費用を出したのは、丹波須知の岩崎革也である。旅立つ前、堺は園部から歩いて須知まで行った。

朝鮮と支那との境の
あの鴨緑江
流す筏は多けれど
雪や氷にとざされて
明日はまた
新義州に着きかねる

白頭山から流れる鴨緑江一帯は木材が豊富で、筏がその運搬手段だった。この鴨緑江節は大正年間、大いに流行った。

この鴨緑江に、熊野川の筏師たちは出稼ぎに行った。

大石誠之助（一八六七～一九一二）

新宮は熊野川が太平洋に注ぐ町である。速玉神社（はやたま）前の船町にあったのが、大石誠之助の医院と太平洋食堂だった。（柳公司に『太平洋食堂』という小説もある）

オレゴン大学で医師免許を取り、帰国後、郷里の新宮で開業した。「毒を取る」からドクトルさんと呼ばれた。その後、インドのボンベイ大学で伝染病の研究をしたこともある。

英米では抗議集会のほか、バーナード・ショウが、「日本は今や欧米に伍する文明国となった。その証拠には、十二名の無政府主義者を死刑に処したではないか」と痛烈に冷評した。

西村伊作（一八八四～一九六三）

西村伊作

西村伊作は、誠之助の兄余平と下北山村に千ヘクタールに及ぶ大山林を所有する西村もんの娘ふゆの長男として、新宮で生まれた。一八九一年、両親は名古屋で濃尾地震により死亡。数年後、米国から帰国した叔父の誠之助が引き取った。

余平はクリスチャンで、三人の息子を伊作（イサック）、真子（マルコ）、七分（スチパノ）と名づけた。

伊作は建築家、画家、陶芸家、教育者として、ただ楽しいと言える自由な生活のため、莫大な財を使って生きた。

長女アヤが新宮第一尋常小学校六年のとき、進学させる好ましい女学校がなかった。そこで、東京の駿ケ台に急拠設立したのが文化学院である。

校長は彼自身、学監に与謝野晶子、石井柏亭（はくてい）画伯、日本文学顧問与謝野晶、音楽舞踊顧問山田耕作など。殺された誠之助の妻栄子も学院の「主婦」として住み込んだ。現代国語は晶子自らが編纂。芥川龍之介、菊池寛、有島武郎らも講師として招かれた。

わが子を入学させた親には、谷崎潤一郎、竹久夢二、棟方志功、荻原朔太郎などがいる。

本人設計による西村伊作邸（新宮市丹鶴）

日中、太平洋戦争中も政府と軍部におもねらない伊作は、一九四三年、六本木警察から巣鴨拘留所に入れられ起訴された。文化学院は陸軍が没収した。戦況の悪化、敗戦で、裁判はうやむやとなる。文化学院は長女アヤが校長になる。二〇一八年まで存続した。

佐藤春夫（一八九二～一九六四）

中公文庫が最近も佐藤の短編や紀行文を、テーマを設定して出している。

西村七分設計による佐藤春夫邸（新宮市丹鶴）

国見聞録』や『台湾小説集』がそれである。『台湾―』の中の傑作『女誡扇奇譚（じょかいせんきたん）』は四年前、台湾で佐藤春夫展があり、ブームとなった。

佐藤の著作は膨大である。新宮の少年期を描いた『わんぱく時代』が面白い。誠之助の生きていた新宮をイメージできる。

一九〇九年、誠之助ら有志が文化講演会を開催した。演者（与謝野晶、生田長江、石井柏亭）がビールに酔って、開演が遅れた。場つなぎに十七歳の中学生春夫がしゃべらされた。この内容が物議をかもし、新宮中学（現高校）を無期停学となる。生徒の七割もが抗議の同盟休校に加わり、学校は大混乱となった。

生徒たちは、鴨緑江節の替え歌で校長をおちょくる。誠之助は「熊野新報」で校長をぼろくそにこき下ろした。

春夫は伊作宅に毎日のように入りびたった時期がある。建築に興味をもち、多くの作品に洋館が出てくる。加藤百合が『大正の設計家 西村伊作と文化学院』（朝日選書）で詳しく分析している。

新宮の西村伊作邸の隣りに、西村七分設計の春夫邸が今年、移築された。佐藤家も父まで九代つづいた医家だった。

〈愛読多謝　有田誠〉

有田さんには長期にわたり、連載ありがとうございました。この場を借りてお礼申し上げます。
来月からはクローバー職員による「認知症介護記」（タイトル仮）の連載をスタートします。